





## 審査結果報告書

平成 28 年 8 月 23 日

|     |     |        |   |
|-----|-----|--------|---|
| 主 査 | 氏 名 | 小泉 和之郎 |  |
| 副 査 | 氏 名 | 渡辺 昌孝  |  |
| 副 査 | 氏 名 | 田 邊 聡  |  |
| 副 査 | 氏 名 | 三 枝 信  |  |

1. 申請者氏名 : 藤武 義人
2. 論文テーマ : The analysis of inflammatory signals in Japanese children with Crohn's disease  
(日本人小児クローン病における炎症性シグナルの解析)

### 3. 論文審査結果 :

クローン病の病態には、Th1 と Th17 を中心とする様々なサイトカインが関与していると考えられるが、日本人小児クローン病における詳細な検討はなされていない。今回、藤武らは日本人小児クローン病の活動期と寛解期における炎症性サイトカインとそれらのシグナル伝達因子の発現を血清と腸管粘膜を用いて解析した。クローン病活動期と診断された症例とクローン病寛解期と診断された症例の血清サイトカイン値の分析に使用した。また、内視鏡検査で得られた腸管粘膜組織を用いて、シグナル伝達因子の発現を real time PCR 法で検討した。血清サイトカイン値の検討では、クローン病寛解期と比べて、クローン病活動期における IL-6 と TNF- $\alpha$  が有意に増加していた。腸管粘膜の real time PCR 法では、クローン病寛解期や正常粘膜の小児例と比較して、クローン病活動期におけるインターフェロン $\gamma$  と STAT4、TGF- $\beta$  1 の発現が有意に増強していた。これらの結果より、日本人小児クローン病の病態には、Th1 と Th17 のシグナルが深く関与している可能性が示唆された。これらの研究は日本人の小児期におけるクローン病の病因を探るうえで有用な研究であると考えられ、学位論文として十分な研究報告であると評価された。